

全科協 News

vol.55

NO.3

CONTENTS

- P2 特集
- P10 海外博物館事情
- P12 5月6月の特別展等
- P14 学芸員専門研修報告
- P15 リニューアル情報
- P16 トピックス



表紙の写真の解説は、P16の「我が館の推しなモノ・コト」をご覧ください

特集 Special

令和6年度 海外科学系博物館視察研修報告

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718

東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

TEL 03-5814-9171

<https://jcsm.jp/>

令和6年度海外科学系博物館視察研修報告

令和6年度海外科学系博物館視察研修では、22名の方にご参加いただき、令和7年1月14日(火)から7日間にわたって、台湾の6つの施設を公式訪問しました。ご参加のみなさまに、各館園の視察内容と全体を通しての感想をご執筆いただきました。

国立台湾博物館

National Taiwan Museum

館の概要

国立台湾博物館は、台湾で最も歴史のある博物館である。台北市の中心部に所在し、本館、古生物館、南門館、鉄道部パークの四つの施設からなる。今回の視察研修では、本館と古生物館を訪問した。

本館はその前身が1908年に開館し、1915年に現在の建物へと移転した。1999年から現在の名称となり、おもに台湾の自然や文化、人類史に関する四万点以上の史料・標本について収集し、展示を行っている。入館料は、本館と古生物館の共通チケットがNT\$30である。

展示

本館は二二八和平公園内にあり、地下一階から三階まで展示場がある。外観は西洋風で、建物正面にギリシャ建築風の列柱が並び、ローマ建築風のドーム式屋根にはステンドグラスがあしらわれている。訪問時には2024年の野球の国際大会プレミア12での台湾チームの優勝を祝した垂れ幕が正面にかかっており、中央ホールでは優勝記念の特別展示「冠軍



国立台湾博物館 本館

之路」の一部として優勝トロフィーが展示されていた。

常設展示には、「博物台湾」、「台湾の発見 一台湾の自然史と自然主義者の再訪一」、「台湾・我的家—児童探索展」がある。今回は「博物台湾」と「台湾の発見」を見学した。

「博物台湾」は「台湾の物語」と「自然・台湾」の二つのゾーンで構成されている。「台湾の物語」では、台湾の人々の生活や、台湾の原住民の文化や信仰に関する展示のほか、現存する最古の漢文地図「康熙台湾輿図」の原本など歴史的に貴重な史料も展示されている。台湾の国宝に指定されている「康熙台湾輿図」では、長さ5m超の絵巻軸と組み合わせられた可動式のモニターで詳しい解説が見られる、面白い展示手法がとられていた。

「自然・台湾」では、台湾の動植物や地理に関する多くの標本が見られる。こちらはインスタレーションを組み合わせた展示手法が用いられており、岩石の展示では産地に対応させて標本を同心円状に陳列する斬新な配置がとられており、海の生態系の展示では生態系を構成する生き物がらせんを描きつつ上昇するように配置され躍動感を与えるなど、眺めるだけで楽しい展示空間になっていた。

「台湾の発見」は「発見の道」「台湾新象」「過去的未来」の三部構成で、台湾の自然に関する標本を台湾博物学の発展の歴史と合わせて展示している。台湾博物学の発展には、川上瀧彌や岡本要八郎、森丑之助など多くの日本人学者が貢献しており、彼らの功績についても展示の中で取り上げられていた。また、絶滅したとされる臺灣運豹（タイワンウンピョウ）の実物標本など貴重な過去の記録から、現代アートの展示もあり、台湾の過去から現在、未来へと思いを馳せる構成となっていた。

本館の向かいにある古生物館は2010年開館。石造りの外観からは古生物の博物館とはわかりづらいが、これはこの建物がかつて日本勧業銀行の支店だったため、本館と同様に建物そのものが国定史跡に指定されている。館内の常設展は、台湾の金融史に関する展示が並ぶ「土地銀行行使室」と、「古生物展—生命の史詩—進化とのコラボ」からなる。

「古生物展」では、地質時代についてまとめた「タイムコリドー」の展示を入口として、三葉虫からアンモナイト、恐竜、象や鯨類などの哺乳類まで、幅広い年代の古生物の化石を展示している。特に恐竜の化石は、展示室中央に大小合わせて15から20点ほどが並び、非常に強いインパクトがあった。展示室はその恐竜を囲むようにして設けられた回廊をのぼりながら見学する構成で、トリックアートやAR、化石の



古生物館の恐竜化石

発掘を疑似体験できるインタラクティブな展示もあり、こちらも工夫の凝らされたものとなっていた。

所感

国立台湾博物館は、日本とともに関わりの深い博物館である。台湾の動植物、地理など自然史に関する標本のみならず、台湾が歩んできた歴史、原住民、人々の生活や信仰についても知ることができる。本館は、「児玉総督後藤民政長官記念館」として日本統治時代にもたらされた近代化の功績を記念して建てられたものであり、現地ボランティアガイドの丁寧な日本語の解説によれば児玉家と後藤家の家紋の植物（藤、笹）が1階中央ホールのステンドグラスのデザインに用いられている。また、常設展「台湾の発見」では、日本人学者が台湾の各地へ調査に出向き収集した文物や、森丑之助の指導により原住民16民族の特徴を表現した博多人形のコレクションとカタカナの台湾全土地図が陳列され、台湾の地理的要因と人々の生活や信仰、風習を関連付けた展示が印象的だった。また、一時は日本統治の雰囲気を排除するために撤去された児玉、後藤両名の銅像だったが、60年間保管された後、ふたたび本館3階に展示されるようになった経緯も説明されており、「回帰」というテーマの中で、自然史標本や人物に関するエピソードを通じて、国立台湾博物館の成り立ちと日本との関わりについて表現されていた。台湾は、複数の統治時代を経て歩んできたが、その歴史を、客観的な視点に立って捉え、台湾全土の自然、地理、生活、文化をとてもよく展示に反映しているという点において、国を代表する総合博物館としての自負を感じた。

つくばエキスポセンター 斎藤 俊明
国立科学博物館 登島 志穂



1. 館の概要

国立自然科学博物館（以下、NMNS）は台湾の台中市に位置し、1986年に設立された。台湾で最も重要な自然科学博物館の1つであり、自然科学および科学技術の普及と教育の促進を目的としている。

博物館の発展のための2つの目標

- (1) 自然科学の原理と現象を説明し、科学に対する一般の興味を刺激すること。
- (2) 台湾の代表的な自然標本を収集すること（人類学的対象物を含む）。

毎年10回以上の特別展や、台湾の農村部の学校への訪問、学術研究など、数多くの教育活動が展開されており、50万人以上の学生に利用されている。また、国内外から300万人の観光客が訪れている。博物館の面積は87,276m²であり、300人以上のスタッフと1,500人以上のボランティアによって運営されている。なお、ボランティアになるためには試験があり、各エリアを専門の知識をもつボランティアが担当している。



国立自然科学博物館外観（人類文化・地球環境ホール入口）

2. 訪問・見学プログラム

会議室でのNMNS焦傳金館長や他職員との交流会の後、生命科学ホール地階の展示「Nature's Wonderland 奇幻自然」や特別展「気候行動 全球沸騰時代特展」、科学センター、植物園などを案内・解説していただきながら見学した。

交流会では、展示手法や学校教育プログラム等についての質問に各担当者が答えてくれた。展示手法については、全年齢を対象と考え、例えば「Nature's Wonderland」では、See（見る）、Link（連結）、Wonder（好奇心）の3つをキーワードに、展示を組み立てているとのことであった。

3. 展示内容

本館には、地球科学、生物学、環境科学、人類学など、多様な科学分野の常設展示があり、ドームシアター・科学センター・生命科学ホール・人類文化ホール・地球環境ホールの5つのエリアと、屋外に隣接している植物園の、計6つのエリアに分かれている。

①ドームシアター

プラネタリウムを備え、天文学に関する映像プログラムが上映されている。また、宇宙探査、惑星の構造、星座の形成などについて学ぶことができる。

②科学センター

力学・光学・電気・磁気・音・流体力学などの様々な科学の原理を、実際に触れて体験できる展示が多数ある。定期的に開催されるサイエンスショーやワークショップを通して科学への理解を深めることができたり、人工知能（AI）、ロボット工学、VR（仮想現実）など最新技術の展示により、未来の技術が社会へ与える影響について学んだりすることができる。

③生命科学ホール

生命の起源と進化、人体の構造、遺伝学、生態系、バイオテクノロジーに関する展示を中心としている。生命誕生のシミュレーションや化石展示、VR進化体験などができる。また、胎児の発育過程や成長に伴う身体の変化を模型と映像で紹介している。

④人類文化ホール

人類の文化と科学文明をテーマにした展示エリアである。ここでは、中国医学の進化とその影響や、中国の科学と技術について、世界各地の気候や土壤が育む多様な農業形態、台湾の南島語族の文化とその多様性などを紹介している。

⑤地球環境ホール

地球の多様な環境と生態系、そして人類との関わりをテーマにした展示エリアである。（現在は、工事のため一時閉鎖中）

⑥植物園

台湾国内外の植物の多様性を学ぶための施設であり、熱帯雨林や乾燥地帯の植物などがテーマ別に展示されている。

4. 取組

NMNSは、学校教育を補完する役割を担っており、科学の普及を通じた生涯学習の促進も目指している。年齢や職業に関係なく、誰もが科学を学べる環境を提供するために、

「子どもから大人まで楽しめる多層的な学習プログラムの提供」「学校教育との連携強化（教師向け研修や教材開発を含む）」「デジタル技術を活用した遠隔学習の拡充」の方針が掲げられている。

また、台湾は台風や地震などの自然災害が多い地域であり、NMNSではこれらの自然現象についての教育も重視している。特に、気候変動、生物多様性、環境保護に関する展示やワークショップを積極的に実施している。さらに持続可能な開発目標（SDGs）を意識したプログラムが増加しており、社会的課題の解決に向けた意識改革を促している。



特別展でのデジタル映像を用いた没入感のある展示

5. 所感

各エリア、体感しながら学ぶことができる工夫がされていた。それぞれ触ることのできる展示物や図・映像、プロジェクションマッピングを使って説明され、視覚や体験によって来館者の記憶に強く残っていると思われる。また、各展示の横に詳しい説明を示したQRコードも設置されており、来館者の探求心をより深める工夫がされていた。全方向スクリーンによる映像による体感コーナーなど、工夫が多岐にわたる。

特別展では「地球沸騰化時代」を取り上げており、地球温暖化がもたらす深刻な影響と、その対策の必要性を最新のデジタル技術と实物展示を融合させ、来場者に強い印象を与え啓発する内容であった。一つ一つの展示にメッセージ性の高さが伺えた。

また、見学した科学センターでも、多くのボランティアが活動されており、来館者への展示や学習プログラムの提供だけではなく、生涯学習・活動の場としても大きな役割を担っていることを感じた。

福岡県青少年科学館 田中 ふみ
明石市立天文科学館 鈴木 康史

車籠埔断層保存園区

Chelungpu Fault Preservation Park

国立自然科学博物館921地震教育園区

National Museum of Natural Science/921 Earthquake Museum of Taiwan

◆はじめに

台湾島はユーラシアプレートとフィリピン海プレートの衝突体として形成され、複雑な地質構造を反映して生じる活断層型地震が頻発し被害をもたらしてきた。このため災害対策や防災教育は国として強く求められている。本稿では令和6年度全国科学博物館協議会海外科学系博物館視察研修において、2025年1月15日に見学した車籠埔断層保存園区・国立自然科学博物館921地震教育園区について報告する。

◆車籠埔断層保存園区

南投県竹山郷にある「車籠埔断層保存園区」は、1999年に発生し3千人以上の死者を出した集集地震（マグニチュード（M）7.3）の際に地表に現れた活断層である車籠埔断層を保存するとともに、地球科学や地震災害などに関わる展示とそれらを通じた教育を行う施設で、国立自然科学博物館が運営を担当している。同館は、展示施設である地質科学館と、車籠埔断層を保存する断層トレンチ保存館から構成される。

地質科学館は、1階が地球科学に関する常設展および企画展示エリア、2階が主に電気にまつわる科学教育展示室となっている。入口すぐの1階から2階への吹き抜けの壁面には、車籠埔断層の剥ぎ取り標本2面分（約6×15m）が展示されており、階段を登りながら剥ぎ取り標本を下位から上位まで間近で眺められるように工夫されている。常設展では断層と地震や台湾の地質についてのみならず、地球科学一般について岩石や化石を交えて解説しており、Kinectを使い身体を動かして学べる地質調査体験シミュレーション、床に台湾の航空写真を投影して地形を学べるシアター室など若年齢層が楽しみながら学べるような工夫も凝らされていた。

断層トレンチ保存館は、2002年に詳しく調査研究された車籠埔断層のトレンチ掘削現場を保存している場所で、ト



車籠埔断層保存園区 断層トレンチ保存館の断層トレンチ

ンチの3面（北、東、南）で断層を3次元的に観察できるようになっている。トレンチ面をスクリーンにしたプロジェクトマッピングで断層形成過程の解説を三ヵ国語（英・中・日）で行うことができる。今回は日本語で解説をいただいたことによって研究成果が大変理解しやすい展示だった。

企画展示エリアはおよそ1年単位での企画展示が行われており、訪れた際には2001年7月の台風8号“Toraji”がもたらした水害の展示を主にパネルや動画で紹介していた。Torajiによる集中豪雨は、集集地震による土砂災害が生じた後に襲ったために複合的な災害となり、記録的な被害をもたらしたが、地震も台風も多い台湾では、そのような複合的災害が生じやすいという特性が良く理解できた。

◆国立自然科学博物館分館 921 地震教育園区

台中市霧峰区にある921地震教育園区は、集集地震による断層や被害を受けた遺構をそのまま保存しているエリアで、かつて中学校だった場所に設けられている。主に車籠埔断層保存館、地震工学教育館、映像館、防災教育館、再建記録館の5つの施設から構成される。

断層保存館では地震後の調査研究の過程で掘り出した断層面や、地面が断層活動に伴って2m以上食い違っている様子が見学できる。施設内では台湾の地質や地震、断層のメカニズムなどについて、動画や体験型展示などを通じて子供でも分かりやすい形で解説がなされている。

映像館の起震室では、起震装置と正面および左右の3面に投影した映像によって地震体験ができ、集集地震と2011年東北地方太平洋沖地震の揺れを体験させていただいた。真に迫る地震体験で、同様の巨大地震を体験していない年齢層に対する教育的効果が大きいことが伺えた。

地震工学教育館は地震災害について工学的側面から学ぶ施設で、液状化実験、揺れに強い構造の建物づくり体験、地震時の安全対策体験などが自由にできるようになっている。また、倒壊した校舎をそのまま残している損壊教室エリアが屋外にあり、校舎内部は見通しを遮らないよう透明アクリル製の柱・壁で補強されている。

防災教育館では、若年層向けにゲーム風のキャラクターやアニメーションを使い、災害と防災について紹介する展示が行われていた。いずれの施設でも、若い世代への教育に非常に力を入れていることが伺える。



921地震教育園区で保存されている断層活動ですれたグラウンド

◆おわりに

いずれの館も、台湾の地質を反映した災害の調査研究と、その成果および防災の概念を次世代へ引継ぐことに大きく重点を置いていることが伺えた。保存する為の風化対策もしっかりしている。台湾では自身が直接体験していない過去の災害に关心が薄い若年層が増加しているとのことであったが、自然災害の多い国において、自然災害の調査研究や、災害の

記憶を風化させないための取り組みがいかに重要であるかを改めて感じさせられた。

最後に、我々の帰国直後となる1月21日未明に台南でM6.4の地震が発生した。被害を受けた方々にお見舞いを申し上げるとともに、被災地の一日も早い復旧を祈りたい。

平塚市博物館 野崎 篤
科学技術館 秋元 智博

国立科学工芸博物館 *National Science and Technology Museum*

1. 概要

国立科学工芸博物館は、台湾南部の高雄に位置する台湾初の応用科学博物館で、1997年11月に一般公開された。科学技術教育の普及を目的とし、台湾の工業や関連する科学技術、生活に密着した社会課題など、幅広いテーマを扱っている。敷地面積は19haと大変広く、南館と北館の2つのエリアに分かれている。敷地内にはオブジェなど芸術作品が点在する緑地があり、展示と併せて散策も楽しめる。

本博物館の主な収蔵品は科学技術に関する文物で、その数は5万点に上る。近年の来訪者数は約184万人、主な観客層は小中学生と家族連れで、来園者は40%を子供が占めている。

2. 展示

国立科学工芸博物館の主な展示エリアである北館には、常設展示ホールが18、特別展示ホールが5、そのほかに3Dシアター、科学教室用の部屋を備えている。常設展示ホールの部分リニューアルの実施や、自主企画だけでなく外部企画も含めた特別展示ホールの活用、3Dシアターのレンタルサービス向上など、展示エリアの運営を積極的に活性化する取り組みを実施している。

常設展示ホールは、ホールの中でテーマをしっかりと完結させているためか、階層ごとの統一感は重要視していないと感じた。展示物の主要なターゲットは小中学生および家族連



写真1：主な展示エリアとなっている北館

れであることは、日本と変わらない。子供向けの展示物は、未来の生活に備えるコンセプトのもとに企画されている。例えば、小中学生のカリキュラム（「科学開門」展示ホール）や科学技術系キャリア教育（「技職新視界」展示ホール）を意識したコンセプトの展示ホールを注力的に展開しており、博物館と学校教育との密接な関係性を感じた。また、低年齢向けに特化した展示ホール（「児童科学」展示ホール）では、展示物の構造や解説が年齢に合った作りになっており、大変特徴的で印象深かった。

なお、常設展示ホールは、全面または部分リニューアルを積極的に実施しており、その際は、興味関心度の高い科学技術の話題（半導体や地球温暖化、産業ロボット、防災教育など）や生活経験に結び付くものを重視して実施している。

3. 職員・ボランティア

職員数は約130人で、展示や科学教育などの各部門を担当している。研修制度が手厚く、全職員は年間で20時間以上の業務研修が必修で、その他専門研修も設定されている。

年間ボランティア総人数は1,047人で、展示解説など様々な活動を行っている。毎年、展示ホール教育訓練やサービス向上セミナーなどを実施し、知識や能力の継続的な向上に取り組んでいる。

4. 特色ある取組

■外部との連携

学校連携として、学校団体向け校外学習プログラムの企画や、インターン生及び社会奉仕活動の受け入れ等を行っている。防災について学べるキットなどの教材について、学校への貸し出しも行っている。館内は小学生団体の来館者が非常



写真2：ハンズオンや映像を活用した展示が多い

に目立ち、学校に有効に活用されている印象を受けた。

台湾南部最大の工業都市である高雄の特色を活かし、企業との連携も盛んで、近年は台湾中油株式会社、上銀科技等との協力実績がある。来訪時には、日本の精密測定機器メーカー「ミツトヨ」と連携した特別展「星動時刻・量測傳説」が開催されていた。

■積極的な自己調達

本博物館の管轄は教育省で、運営資金源は政府補助金と自己調達に分かれる。近年は自己調達が順調で、委託研究プロジェクト等の外部資金の獲得、民間投資の誘致、有料特別展示の導入等を積極的に行い、政府補助金を上回る54.6%の収入があった。夏と冬に実施する子供向けのサマーキャンプは、自己調達の中で最も多くの収入を得る人気イベントとなっている。

5.まとめ

展示物全体は、コンセプトの通り小中学生を意識した内容でハンズオン展示が多かった。楽しい体験を通じて、幼少のころより科学や技術に興味を持たせ、最終的には職業や生活へと展開できるよう、その過程の随所に関わるような仕組

みや取り組みをしていると感じた。近年、話題となるテーマを積極的に導入しており、科学技術と自分の生活が深くかかわっていることを意識してもらう意図を感じ取れた。それらを確信させるように、本研修期間中、もっとも小中学生の団体が多く訪問しており、彼らの移動手段である大型バスが数多く駐車し、団体用の昼食用休憩スペースは大変にぎわっていた。

また、特別展ホールを含め、大型のプロジェクターを活用した映像展示が多かった。例えば、防災をテーマにした常設展示ホール（「希望・未来 莫拉克風災記念廳」展示ホール）では、プロジェクターの映像を壁面だけでなく、床など会場全体に投影したコーナーがあり、土石流の威力や緊迫した臨場感に思わず息をのんでしまった。

事前にお送りした数多くの質問事項や、当日の意見交換にも詳細かつ丁寧に回答いただいた。運営や予算確保に対する攻めの戦略姿勢、この先の未来に向けて博物館としての存在意義を一般の人々に根付かせていくという館長を始めとした職員・ボランティアの皆様の意識に、本当に多くのことを学ばせていただいた訪問先となった。

科学技術館 蔵居 悠

国立科学博物館 下田 彰子

国立海洋科技博物館

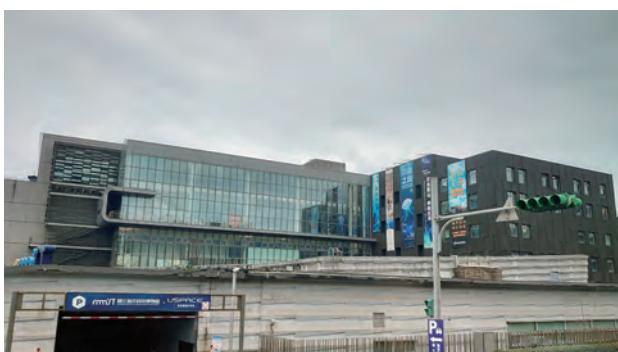
National Museum of Marine Science and Technology

1. 館の概要

国立海洋科技博物館は台湾第二の港湾都市である基隆に位置し、今回訪問した国立博物館の中では最も新しく、2013年にオープンした海洋総合博物館である。運営母体は日本の文部科学省にあたる教育省であり、博物館の使命を次のように掲げている。

- ①海洋の持続可能な発展を維持すること。
- ②海洋科技博物館の研究とコレクションに基づいて、学校や一般の人々が展示や教育、レクリエーション活動を通じて、海を受け入れ、海に感謝し、海を維持することを目指す。

利用者は増加傾向で、近年では年間約250万人に上ってい



メイン施設であるテーマ館の外観

る。日本統治時代にアジア最大規模を誇った火力発電所跡地を再開発し、敷地総面積は約48haを誇る。敷地内は大きく4つに分けられ、主要な博物館施設がある「テーマ館エリア」、自然海岸・公園からなる「海岸探索エリア」、「庭園エリア」、「海浜レクリエーションエリア」からなる。また、職員数は60人、2021年の予算は約2億7千400万台湾ドル（日本円で約10億円）となっている。

2. 施設・展示の構成

敷地内には多数の博物館施設があり、メインの施設である「テーマ館」（7階建て）の他、地域文化に焦点を当てた「地域探索館」、巨大なシアター施設である「海洋劇場」、デジタルを複合した水族館施設「インテリジェント海洋館」、研究・収集センターである「コレクション館」などの他、ホテルや海浜公園、海浜レクリエーションエリアや遺跡など多岐にわたる。また、近隣には昔ながらの漁村や国立台湾海洋大学もあり、それらと連携協力した取り組みを行うことで、地域に



造船業や様々な船舶の展示

密着した施設となっている。

テーマ館では、文化、環境、生物、水産、科学、船舶海洋工学など、海洋に関して総合的に展示されている。展示空間も2層を1フロアで利用して天井が高く、実物資料や模型、ジオラマ、ハンズオン、デジタル画像等の多様な演出が複合導入されており、海洋に興味の薄い層に対しても先ずは視覚的に興味をもたせ、学びへと誘導する意図を強く感じた。館内には子供専用の遊びながら学べるエリアや企画展示室もあり、それぞれの展示エリア毎に適した対象年齢も設定していた。その他、近年作られた「インテリジェント海洋館」は台湾の海洋生物を展示した水族館施設で、デジタル演出が多く見られ、台湾南部の国立海洋生物博物館とは異なる展示演出として差別化が図られていた。

3. 特色ある取り組み

開館の10年前から様々な準備活動が行われており、自然エリアを活用した海洋教育実証ゾーンでのダイビングや稚魚放流、サンゴ移植、カヤック体験、海底の漁網除去など、多様なプログラムが実施され、現在も毎年継続されている。博物館活動ではボランティアの存在も大きく、200名程度に試験で選抜し子どもから老人まで幅広い登録がある。

また、年間3万人程度・50校～100校程度の学校利用があり、台湾全土を対象にした出前授業も行われている。学校利用に際しては事前申込書がWeb経由で入手でき、学習内容や希望する工作教室、教材等の有無を事前確認し、当日のプログラムが実施されている。事前申込書の中には参加者の障がいや配慮事項を確認する項目があり、身体・精神の区別や障がいの程度、補助人員や車椅子の有無等幅広い項目があることから、包摂性・多様性を尊重した姿勢が見て取れた。なお、学校利用の大半は楽しさを重視した利用が多く、カリキュラムに即した利用は全体の3割程度とのことであった。

研修全体を通しての感想

1. 研修参加の目的

福岡市科学館では、外部有識者と館のスタッフが議論し運営方針やテーマを提言する「サイエンスコミュニケーション(SC)開発会議」を開館時から継続して実施している。私は今年度、「次世代型地域科学館の機能」を議論する分科会のメンバーとしてこの会議に参加する機会を得た。会議に参加する中で他館における展示や人材育成の工夫、地域とのかかわりについて学ぶ必要性を感じていたところ、今回の海外研修のお話をいただいた。特に台湾はAI関連技術で国際的にも注目されており、先進的な取り組みが見られると考え、次世代型地域科学館の在り方を考える上で参考になると期待して本研修に参加した。

4. 施策における位置付け・役割

台湾では2000年頃から海洋に関する様々な分野での法整備が急速に行われ、2008年に海洋教育が正式に教育省のカリキュラムになり、2011年には小中学校の九年一貫カリキュラムにおいて海洋教育が導入された。さらに2014年には小中高まで含めた十二年国民基本教育にも組み込まれている。併せて2014年には国立台湾海洋大学に台湾海洋教育センターが設置され、2019年には海洋基本法が制定されるなど、台湾における学校教育・社会教育両分野での海洋教育の推進が正式な施策となった。国立海洋科技博物館は学校教育をサポートする拠点施設の1つに位置付けられ、台湾海洋教育センターなどの他機関とも連動しながら、組織的に推進されているとのことであった。

5. 所感

意見交換と施設見学を通じて印象に残ったことは、日本よりも海洋関連法規の制定は遅かったにも関わらず、既に海洋関連施策及び教育施策において海洋教育の実施が義務付けられ、その実践の場の一つとして国立の総合海洋ミュージアムが設置されていること等から、海洋に関する教育理念と姿勢が日本以上にしっかりとしていると拝察できた。博物館施設の展示面では、デジタル演出を含む複合的な展示手法を多用したダイナミックな施設であり、充実した教育普及活動も見られたことから、台湾における社会教育分野への期待や役割の大きさや、さらに、多様性・包摂性・持続性といった、今後博物館にも求められる考え方や意識についても日本以上に進んでいると感じた。一方で、調査研究が予算的にも思うように出来ていないという共通点があったことは、非常に共感できる部分であった。

船の科学館 吉田 哲朗、高田 浩二、梶谷 東輝、和木 美玲

2. 現地の風土と文化

台湾本島は九州ほどの大きさで、北部は亜熱帯、南部は熱帯に近い気候特性を持つ。現地到着直後は気温27度と驚くほど暖かく、1月の日本からやって来た私たちは不思議な感じであった。その後は台湾を南北に縦断する形で移動し、おおむね天候にも恵まれた。南部ではスコールに遭遇したり日本ではあまり見かけることのない植物や野鳥と出会ったりもして、台湾の多様な自然環境を肌で感じる1週間を過ごした。

台北市や高雄市は観光地として有名で高層ビルの立ち並ぶ大きな都市だが、これらの都市には日本との関わりも色濃く残る。例えば、台北市にある「国立台湾博物館」は様々な建築様式を取り入れた建物で、日本人建築家の野村一郎および荒木栄一によって設計された。また「高雄市立歴史博物館」は当時の高雄市役所として、日本の大手企業が設計、建設に携わったそうである。これらはいずれも日本統治時代の建築物でありながら、現在は多くの人が訪れる施設として機能している。街のようすから台湾と日本の歴史について学ぶと同時に、文化財の保存・活用の動きが活発であることも感じられた。

3. 所感

3-1. 展示

訪問した国立の科学系博物館はどの館も共通して広い展示スペースを有する。その中に自然環境から産業や先端技術まで多岐にわたる展示テーマを設定しており、来館者は広い分野の学びを得ることができる。また展示以外にも幼児向けの体験エリアの設置やスマートフォンを使った謎解きなどのデジタルコンテンツの活用があり、幅広い年齢層が楽しみながら科学へ興味を持てるような工夫がされていた。

台中市の「国立自然科学博物館」では、「持続可能な開発目標 (SDGs : Sustainable Development Goals)」の中の自然環境に関わる項目をテーマにした自主企画展を見学した。来場者は展示体験を通して環境問題について学び、自分がどのようなアクションができるかを、AIを使って最後にアウトプットすることができる。映像の鑑賞やゲームの体験のみで終わらせるのではなく、自分の考えを何らかの形でアウトプットするという構成は、今後の展示やイベント企画において意識したいと思った。

3-2. 人材の育成

台湾の科学系博物館は学校との連携にも力を入れており、日本と比較すると小・中学校との関わりがより密接であるように感じた。特に基隆市の「国立海洋科技博物館」では学校での指導が難しい水産・海洋分野について、教員向けの研修プログラムを実施している。これは子どもたちへの教育普及にとどまらず、教員の専門性向上にも貢献する取り組みである。同時にこのような交流は博物館と学校との相互協力にもつながり、より良い学びの場を追究できるしくみでもあるように感じた。また「国立自然科学博物館」では約1,500人のボランティアスタッフが活動しており、解説員になることができるはその中から選抜試験に合格した人のみであるという。これは来館者へのサービス向上のみでなく、スタッフの学習支援にも繋がっていると思う。このような人材育成のための熱心な取り組みは、教育機関としての博物館の役割を強化している。

3-3. 地域とのかかわり

「国立海洋科技博物館」は地域との連携に特に注力している。この博物館は2014年に開館した比較的新しい施設で、周辺の漁村や大学と協力しながら海洋環境の保全や研究に努めている。館のある基隆市は台北市や台中市などの主要観光地から少し離れているため、地元に根ざした活動を意識しているとのことだった。建物には日本統治時代に建てられた発電所の建材を再利用するなど、その土地の歴史を保存し伝える役目も持っている。代表者が「地域住民と一緒に成長できる博物館をめざしている」と述べていたことはとても印象的で、地域と共に発展を目指す姿勢は比較的新しい科学館ならではの特徴といえるのかもしれない。

4. まとめ

本研修では6施設を公式訪問し、自主研修として2つの市立博物館を見学した。幅広い層の来館者へ多様な学びの機会

を提供するための工夫、学校連携やスタッフの専門性向上における独自の取り組みについて知ることができた。文化的背景の違いはあるものの、地域の特性を活かしながら地元住民と連携を図ることは、次世代型地域科学館の在り方を検討する上でも参考になった。また今回の研修を通して、海外だけでなく国内のさまざまな博物館、企業との方とお話しする機会を得て、非常に有意義な時間を過ごすことができた。この経験を館どうしの連携につなげて、今後の活動に活かしたいと思う。

福岡市科学館 高瀬 美菜子



TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



地学標本／化石・鉱物・岩石
古生物／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

〒151-0051渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

TEL03-3350-6725 FAX03-3350-6745

<http://www.tokyo-science.co.jp>

E-mail:info@tokyo-science.co.jp

Practical Specimens for Study of Earth Science



■ 移転

気候博物館が、恒久施設を新設（2027年開館予定）

2015年の設立以来、ニューヨークを拠点に、気候変動をテーマに博物館活動を展開してきた、気候博物館が、ようやく恒久的な場所に移り、2027年から活動を続けることになった。新しい施設（延べ床面積（2,230m²）は、ニューヨーク市マンハッタン区のハドソン川に面した再開発区「ハドソン・ヤーズ（Hudson Yards）」に整備中のツインビル「ハドソン」（総整備費：13億5千万ドル）の1階から3階までのスペースに設けられる。同館は2015年の設立以来、ブルックリン植物園やロックフェラー・センター、総合大学のひとつであるニュースクール大学と、気候変動をテーマにした企画展や啓蒙普及活動を展開してきた。2027年以降も、ニュースクール大学とは気候変動関連の共同研究や学生のための教育で連携していく予定だ。またいままで同館は多くの公的な助成を受けてきたが、2027年以降はニューヨーク州エネルギー研究開発局との新たな連携が決まっている。

Climate Museum, New York.

<https://www.climatemuseum.org/press/permanenthome>
<https://www.theartnewspaper.com/2025/01/06/new-york-climate-museum-permanent-space-hudson-yards>

■ 企画展・特別展

韓国・国立生物資源研究所で、ソク・チュミョン蝶類コレクション展（里帰り展）を開催

2024年11月28日に、首都ソウル（都市圏人口：2,600万人）に隣接したインチョンにある、国立生物資源研究所（NIBR）の付属展示館に、「90年ぶりにわが国に帰ってきた蝶」が開幕した。同展の出品標本は、朝鮮半島が日本による植民地支配下にあった期間に、平壌生まれの昆虫学者ソク・チュミョン（1908-1950）が1930年代から1940年代にかけて朝鮮各地で採集した膨大な点数の昆虫標本（約75万点）の一部だ。もともとソク・チュミョンが採集した昆虫標本の大部分は、彼が研究員として勤めていた、ソウルの国立科学博物館で保存されていたが、それらのほとんどが朝鮮戦争の中で爆撃によって焼失ってしまった（ソク自身も戦乱の中で銃撃されて死亡）。

今回国立生物資源研究所の企画展で出品されたチョウ類標本（35種125点）は、もともと九州大学農学研究院の標本室に残っていたチョウの標本にあったもので、悉皆調査を行った国立生物資源研究所と九州大学との間の協議で、国立生物資源研究所に寄贈された、いわば「里

帰り品」だ。会期は、2025年3月30日まで。

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20250315/k10014748511000.html>

<https://www.nibr.go.kr/cmn/wvtex/nibr/planngDspyGuidance/planngDspyGuidanceDetail.do>

https://www.youtube.com/watch?t=82&v=gSGu71mA3_A&feature=youtu.be

https://www.wikiwand.com/es/articles/Seok_Joomyung

リオデジャネイロのフィオクルズ生命の博物館で、「ネッタイシマカ：それは何の蚊？」展を開催

2024年12月27日に、ブラジルはリオデジャネイロ（都市圏人口：1,400万人）にある、リオデジャネイロ生命の博物館で、「ネッタイシマカ：それは何の蚊？」が開幕した。同展は、デング熱、ジカ熱、チクングニア熱などの病気を媒介する蚊であるネッタイシマカの注意と駆除の重要性について、社会の意識を高めることを目的としている。構成は、「デング熱」、「ジカ熱」、「チクングニア熱」、「黄熱病」、「ウイルス—ウイルス内部」、「ブラジル国内の蚊」、「解決策と制御を求める研究の最前線」というテーマに分かれている。遊び心があり、感覚を刺激するダイナミックな展示空間の中で、観覧者はウイルスの媒介昆虫の潜在的な繁殖場所を見つけたり、昆虫を特定して捕獲したりすることができる。拡大鏡、顕微鏡、仮想現実（VR）メガネを使用して、ネッタイシマカの世界を探索できる。担当学芸員：Waldir Ribeiro, Luis Carlos Victorino, Fernanda Gondra, Miguel Oliveira. 賛助協力：SCジョンソン社（本社：米国ウィスコンシン州ラシーン）。会期は、2025年11月26日まで。

Aedes : Que Mosquito É Esse?

Museu da Vida Fiocruz. Rio de Janeiro.

<https://www.museudavida.fiocruz.br/index.php/noticias/2186-exposicao-aedes-que-mosquito-e-esse-abre-英リバプールで、ハチをテーマにした企画展を開催>

2024年5月4日に、リバプール（都市圏人口：51万人）にある、「世界博物館」（リバプール国立博物館機構の1つ）で、ハチの生き残り戦略を紹介した企画展が開幕した。同展は、1億2千万年にわたる、ハチの適応と生存の物語である。ハチは恐竜の時代から地球上に生息しており、なかでもミツバチは人間の生存に不可欠である。展示では、環境と気候の変化により、彼らの存在は脅威にさらされていることを訴えている。担当学芸員：Tony Hunter, Leanna Dixon. 制作協力：Wolfgang

Buttress Studio (制作拠点:英ノッティンガム)。会期は、2025年5月5日まで。

Bees : A Story of Survival.

World Museum. Liverpool.

<https://www.liverpoolmuseums.org.uk/whatson/world-museum/exhibition/bees-story-of-survival#section--the-exhibition>

<https://www.youtube.com/watch?v=0CIMwKCFAdg>

<https://www.youtube.com/watch?v=OuDCEgE784g>

米ロサンゼルス自然史博物館で、「オオカミ：ロナン・ドノバン写真展」を開催

2024年9月17日に、ロサンゼルス（都市圏人口：382万人）にある、ロサンゼルス自然史博物館（ロサンゼルス郡立自然史博物館の1つ）で、野生動物の写真家ロナン・ドノバンが撮影した北米のオオカミの写真展が開幕した。同展は、2014年以来、アメリカの巨大温帯生態系の一つであるイエローストーン圏生態系（Greater Yellowstone Ecosystem）と、カナダの北極圏で、生物学者から野生動物の写真家に転じたドノバン（1983年生まれ）が、それぞれの地域に棲むオオカミを写した作品で構成されている。北米のオオカミは、オオカミ管理法によりますます脅威にさらされており、人間は彼らが生き残るために必要な土地と食料源を侵害し続けている。ドノバンの説得力のある写真は、誤解されることの多いオオカミに対する理解を深めることを目的としている。担当学芸員：Tammi Hanawalt（全米野生生物美術館）。制作：全米野生生物美術館とナショナルジオグラフィック協会。会期は、2025年6月22日まで。

「オオカミ：ロナン・ドノバン写真展」は、2023年に全米野生生物美術館（米ワイオミング州ジャクソンホール）で立ち上がり、ベンド高地砂漠博物館（オレゴン州ベンド）、オレゴン大学付属自然史博物館（オレゴン州ユージン）で開催された。ロサンゼルス自然史博物館での開催後、米国内の各地で巡回する予定だ。

Wolves : Photography by Ronan Donovan.

Natural History Museum. Los Angeles, California.

<https://nhm.org/wolves-photography-ronan-donovan>

<https://www.youtube.com/watch?v=DWLwgpxJKG8>

<https://www.nationalgeographic.com/expeditions/experts/ronan-donovan/>

ウィーンのフロイト博物館で、フロイト以降の精神分析学派の発展を紹介した企画展を開催

2024年12月14日に、オーストリアの首都ウィーン（都市圏人口：290万人）にある、ジークムント・フロイト博物館で、「果てしない分析：フロイト以降の精神分析学派」と題した企画展が開幕した。同展は、ジークムント・フロイト（1856-1939年）によって創始された精神分析学が、フロイトの思想と治療法を継承した5つの学

派によって、精神分析学がどのように発展されていったかを紹介したものである。ここで取り上げられた学派は、つぎの精神分析家によって創始された。フロイトの動機論を発展させたジャン・ラプランシュ（1924-2012年）。フロイトの対象関係論を発展させたメラニー・クライン（1882-1960年）。フロイトの欲動理論を取り込みながら、新たに関係精神分析を起こしたスティーブン・ミッセル（1946-2000年）。フロイトの精神分析学をもとに自己心理学を創始したハインツ・コフート（1913-1981年）と、フロイトの精神分析学を構造主義的に発展させたジャック・ラカン（1901-1981年）。担当学芸員：Esther Hutfless. 会期は、2025年9月22日まで。

ウィーンのフロイト博物館（1971年設立）は、1891年から、ナチズムのユダヤ人迫害を受けて、イギリスへの亡命を余儀なくされた1938年まで、フロイトが家族とともに住んでいた、ウィーン市内のバーグガッセ通り19番地の集合住宅に設けられた。

Analysis Interminable. Psychoanalytical Schools of Thought after Freud.

Sigmund Freud Museum. Wien.

<https://www.freud-museum.at/en/analysis-interminable/articles/analysis-interminable>

ロンドンのフロイト博物館で、フロイトに影響を与えた女性たちをテーマにした企画展を開催

2024年10月30日に、ロンドン（都市圏人口：1,490万人）にある、「ロンドン・フロイト博物館」で、「女性たちとフロイト：患者・パイオニアたち・アーチスト」と題した企画展が開幕した。同展は、ジークムント・フロイト（1856-1939年）による精神分析の創始と発展に貢献した女性たちにスポットライトを当てたものだ。ここで紹介された女性たちは、フロイトが「先生」と呼んだ初期の「ヒステリー患者」をはじめ、マリー・ボナパルトのように精神分析医となった後期の患者、娘のアンナ・フロイトとそのパートナーのドロシー・バーリングガムや、マリー＝ルイーズ・フォン・モテシツキー、ルイーズ・ブルジョワ、ポーラ・レーゴ、アリス・アンダーソン、トレイシー・エミンなどのアーチスト。担当学芸員：Lisa Appignanesi, Bryony Davies. 会期は、2025年5月5日まで。

ロンドンのフロイト博物館（1986年開館）は、1938年にナチに追われて、オーストリアからイギリスに亡命したフロイトと彼の家族が、ロンドン北部のハムステッド地区の家に設けられた。フロイトは癌で他界する翌1939年まで、この家で診療室を開いていた。

Women & Freud : Patients, Pioneers, Artists.

Freud Museum London. London.

<https://www.freud.org.uk/exhibitions/freuds-women/>

<https://www.youtube.com/watch?v=HUFADzFoCpk>

5月・6月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
釧路市こども遊學館	GWイベント2025「木のおもちゃであそぼう!」	4月29日～5月6日
岩手県立博物館	テーマ展「驚異の部屋～博物館の珍品・お宝大集合」	3月29日～5月18日
	企画展「星にねがいを～宇宙といわての年代記～」	6月14日～8月17日
奥州市牛の博物館	開館30周年記念企画展 荒川弘<百姓貴族>×牛の博物館	4月26日～6月15日
秋田県立博物館	企画展「昭和のアキタ－百年のくらしをつづる－」	4月26日～6月15日
高柳電設工業スペースパーク (郡山市ふれあい科学館)	ホワイエ企画展「ふくしま星・月の風景写真展」	4月26日～6月29日
つくばエキスポセンター	企画展「またまた帰ってきました! トリックアート展～錯視の謎解き～」	3月15日～5月11日
産業技術総合研究所 地質標本館	特別展「地質とAI～ 地球を読み解く新たなアプローチ～」	4月22日～9月7日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	ミュージアムパーク30年のありつけ～いつも茨城県自然博物館はおもしろい!～	2024年11月2日～6月1日
日立シビックセンター科学館 サクリエ	ミニ企画展示「どうする!? プラごみ」	4月26日～7月13日
栃木県立博物館	企画展「外来生物～人によって運ばれた生き物たちからのメッセージ～」	4月26日～6月15日
	テーマ展「地層の剥ぎ取り標本って、おもしろい!」	3月15日～6月15日
	テーマ展「とちぎ昔ばなし～弓の名手那須与一と九尾のきつね玉藻前～」	4月26日～6月15日
群馬県立自然史博物館	第71回企画展「ツツジとその仲間たち－華麗にして奇妙な一族の話－」	3月15日～5月18日
川口市立科学館	文房具～それは「書く」「描く」「消す」を支える科学のチカラ～	6月7日～7月13日
千葉県立中央博物館	房総のミニチュア「生態園」～日本初エコロジー・パークの35年～	2月22日～5月6日
港区立みなど科学館	2025春の企画展 カガクノミカタ ～ディスカバー フシギの見つけ方!～	3月12日～6月8日
国立科学博物館	特別展「古代DNA－日本人のきた道－」	3月15日～6月15日
	気象業務150周年企画展「地球を測る」	3月25日～6月15日
たばこと塩の博物館	浮世絵でめぐる隅田川の名所	4月26日～6月22日
郵政博物館	ゆうちょ開業150年記念特別展示「ゆうちょ」150年～はじまりからアドリまで～	4月26日～6月22日
神奈川県立生命の星・ 地球博物館	企画展「すな～ふしぎをみつけよう～」	2月22日～5月11日
平塚市博物館	春期特別展「近代ひらつかの女性たち」	3月22日～5月18日
糸魚川フォッサマグナ ミュージアム	フォッサマグナ発見者ナウマン博士とひも解く日本地質学の原点と未来	5月10日～7月6日
岐阜県博物館	企画展「雑草とよばないで」	3月18日～6月15日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開催館	展覧会名	開催期間
岐阜かかみがはら 航空宇宙博物館	飛行場の町-各務原が育てた技術者と産業-	3月22日～6月1日
中津川市鉱物博物館	第31回企画展「長島弘三博士生誕100年 長島鉱物コレクション展」	4月26日～6月15日
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	標本サファリー-大地の動物・水の動物-	4月15日～8月3日
	蝶聖・高橋真弓氏を偲んで-富士川から日本列島へ、そして世界へ-	4月15日～8月3日
ディスカバリーパーク焼津 天文科学館	春の特別展「宝探し さがせ! 海賊船の宝」	4月19日～6月29日
鳳来寺山自然科学博物館	日本と世界のカタツムリ展	6月1日～9月7日
碧南海浜水族館	ホライモリ来館20周年企画「ちいさなドラゴンのかいかた」	4月12日～6月29日
名古屋市科学館	特別展「鳥～ゲノム解析が解き明かす新しい鳥類の系統～」	3月15日～6月15日
大阪市立科学館	企画展「プラネタリウム100年-プラネタリウムの過去・現在・未来-」	4月22日～6月29日
高槻市立自然博物館 (あくあぴあ芥川)	企画展「みじかな自然の色さがし-生きものたちの色-」	3月8日～6月22日
伊丹市昆虫館	企画展「伊丹の自然」	2月26日～5月12日
	企画展「チョウを育てよう」	5月14日～7月14日
明石市立天文科学館	プラネタリウム100周年×シゴセンジャー20周年	4月12日～6月1日
	「からくり時計の世界」セイコーミュージアム銀座 共同企画	6月7日～7月13日
鳥取県立博物館	鳥取県立博物館再スタート記念企画「とつとりの藩と城-歴史・自然史・美術工芸-」	5月1日～6月29日
島根県立三瓶自然館	はためく生きもの～国旗に描かれた動植物～	3月15日～5月25日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	上手に眠ろう!～素敵な睡眠のおはなし～	3月15日～7月6日
広島市交通科学館	春季企画展「時代を駆けるミニ四駆」	3月7日～5月6日
愛媛県総合科学博物館	特別展「まんぶく! 食品サンプル展」	4月19日～6月22日
佐川地質館	特別展「洞窟に落ちた動物たち」	2024年5月18日～5月5日
	特別展「蛇紋岩と謎に包まれた黒瀬川帯」	5月24日～2026年5月10日
北九州市科学館 (スペース LABO)	新世界 透明標本展	3月15日～5月18日
北九州市立自然史・歴史博物館	春の特別展「絵本でたどりのちのふしぎ かこさとし×いのちのたび博物館」	3月15日～5月6日
	企画展「堀切辰一生誕100年記念 櫻樓-布の記憶-」	4月12日～7月6日
福岡市科学館	特別展「絵本とあそぼう はじめての? (はてな)」	3月21日～5月6日
佐賀県立宇宙科学館	《ゆめぎんが》春の企画展 2025「ビーコロ® ×おもちゃ展」	3月15日～5月6日
御船町恐竜博物館	令和7年御船町恐竜博物館春期特別展「よみがえる日本の恐竜たち」	3月8日～5月11日
熊本県博物館 ネットワークセンター	動物調査のいろは	3月25日～6月15日
宮崎県総合博物館	第45回SSP展 自然を楽しむ科学の眼	4月26日～6月8日

※7月号は休刊となります。特別展情報はメールでご案内します。7月8月の特別展情報は5月23日(金)までにお寄せください。

オンライン学芸員専門研修を開催しました!

国立科学博物館では、全国の博物館等に勤務する学芸員や職員の方を対象に、一層の資質向上を目的としてオンライン学芸員専門研修を開催しました。

令和6年度は、当館の人類研究部が行っている研究活動や展示、学習支援活動等について、ライブ配信型（Zoom）の講義を行いました。

本研修は全国科学博物館協議会と国立科学博物館が主催しており、本年度は北海道から沖縄県まで、全国から参加があり、幅広い地域の自然史系博物館や歴史博物館、動物園、科学館などから24名の方が参加されました。（協議会加盟館からは7館8名が参加されました）

令和7年度は当館の植物研究部による研修を予定しております。ふるってご参加ください。

国立科学博物館 学習課



「人類学入門」講義の様子



「人類学研究の最新技術」講義の様子

参 | 加 | 者 | の | 声

- ・「違う分野について学ぶことができ新しい発見が多くあった。ほかの博物館を訪ねもっと自分なりに展示について理解を深めていきたいと感じた。」
- ・「レプリカ作成を動物の骨でも行いたいと思った。小学校低学年とその保護者が来園者層として最も多い施設として、触れる標本として活用していきたい。」
- ・「骨格標本を作製する際の参考となった。」
- ・「お金がないからできないと諦めることなく、職員が汗をかいて実現できることもあると伺い地方博物館として励みになりました。」
- ・「オンライン、なおかつ費用が掛からないため受講しやすい。」
- ・「研修に参加させていただき自分の中でのモチベーションがかなり向上しました。違う分野ではありますが、この機会にもっと知りたくなった素敵な研修会でした。」



Panasonic
CONNECT

リニューアル情報

※7月号は休刊となります。次号(7月・9月合併号)に掲載のリニューアル情報は7月10日(木)までにお寄せください。

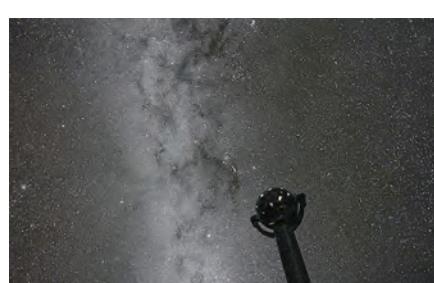
千葉市科学館

[更新箇所] プラネタリウム

[更新内容] 今回のリニューアルでは、従来機の約20倍にあたる約300個の恒星に固有の色を付加し、星の明るさだけではなく色彩まで再現した光学式投影機「ケイロンⅢ」を導入しました。天の川を再現する1億個の高精細な星空や、10万通りの星の輝き、300以上の星雲星団を忠実に再現することもできます。さらに、コンピューターから生成されたデータを元に、高精細なビデオプロジェクターでドーム全体に星空や宇宙、映像などを投影する全天周デジタル映像システム「バーチャリウムⅡ R7」にバージョンアップしました。これまでよりも遙かに美しい星空を投映する光学式と、臨場感あふれるデジタル映像が全天に広がる千葉県最大のドーム空間に生まれ変わりました。

[更新面積] 515m² [公開日] 2025年1月2日

[準備期間] 2024年11月~12月 [担当業者] 株式会社五藤光学研究所



令和
7年度

第1回理事会・総会、施設見学のお知らせ

とき：令和7年7月3日(木)・4日(金)

令和7年7月3日(木)、国立科学博物館上野本館において第1回理事会・総会をハイブリッド開催いたします。記念講演も調整中ですので、お楽しみに。

理事会・総会の翌4日(金)には、千葉市科学館の施設見学を企画中です。施設見学は現地参加のみとなっております。詳細については5月下旬頃にメールにてお送りする予定です。皆さまのご参加をお待ちしております。

空間創造によって
人々に「歓びと感動」
を届ける

株式会社 乃村工藝社

東京都港区台場2丁目3番4号 TEL: 03-5962-1171 (代表)

こころを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

 Tanseisha

空間創造のプロフェッショナル 株式会社丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL: 03-6455-8100 (代表) URL: www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海

我が館の
モノ・コト

推しな

第58回 バンドー神戸青少年科学館 古田 紗香

英国生まれ、100年前の天体望遠鏡で“太陽”を見る



バンドー神戸青少年科学館公式HP
<https://www.kobe-kagakukan.jp/>

晴れていれば黒点やプロミネンスを見ることができ、老若男女目を輝かせながら観察してくださいます。特に今年は太陽活動周期のピークにあたるため、見ごたえ抜群。100年を超える大型の屈折望遠鏡で毎日太陽の観察ができるのはとても珍しく、夏休みになるとスケッチをしに足しげく通ってくださる方も。歴史ある貴重な科学的資料に加えて、開館後初めて大規模リニューアルを果たした2つの展示室の真新しい展示も体験しに、ぜひいらしてください！

予告 次回執筆者は、栃木県子ども総合科学館 福島 杏さんです。

新規 巡回展示募集

加盟館園がお持ちの資料、あるいは新規に製作する企画展示等について
巡回展事業へのご提供をお願いいたします。

ご提供可能な展示がある場合、またご質問がありましたらメール等で事務局までご連絡ください。
みなさまからのご連絡お待ちしております。

※なお本事業は、所有される資料をお譲りいただくものではありません。

【お知らせ】次号（7月号）の休刊について

諸般の事情により、7月号の発行を見送らせていただくこととなりました。次号は7月・9月合併号となります。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

石浜佐栄子（神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員）
平田慎一郎（きしわだ自然資料館学芸員（特命参事））
弘田 澄人（川崎市青少年科学館（かわさき宙と緑の科学館）
天文担当係長）
丸山 啓志（千葉県立中央博物館学芸員）
望月 貴史（岩手県立博物館専門学芸員）
関根 則幸（国立科学博物館学習支援部広報・連携課長）

全科協事務局

国立科学博物館
学習支援部 広報・連携課
(担当:中山・齊藤・清水)
TEL 03-5814-9171
info@jcsm.jp
発行日 2025年5月1日
発行 全国科学博物館協議会 ©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印刷 株式会社セイコー社